

野球部員の図書推薦文がメディアセンターに展示されています

本校では毎朝の SHR 後に、朝読書時間というものが設けられています。我々野球部にとっても、読書は新しい知識を身につけ、視野を広げられるものとして大切にしています。そんな中、1 年生部員の梅本 周君の図書推薦文が本校のメディアセンターに展示されることとなりました。梅本君は野球部員の中でも数少ない SP コース所属で、全体練習だけでなく、毎朝や練習後の自主練習に欠かさず取り組むなど野球部が掲げる「真の文武両道」を体現している一人です。梅本君は今回、国語総合の課題で自身が読んだ図書の推薦文を作成、その内容が大変素晴らしいということで展示されることとなりました。教科担当の先生からも絶賛していただき、野球部としても大変誇らしく思います。梅本君の野球と勉強両面でのさらなる活躍に期待です。



2020/12/07

以下、梅本君の推薦文です。

夏空白花

須賀しのぶ（著）

1946年8月15日、玉音放送からちょうど1年後。敗戦後まだまもなく国民が貧困に苦しむ中、国民を熱狂させた出来事があります。「全国中等学校野球大会」、いまでいう「全国高等学校野球選手権大会」つまり「甲子園」です。GHQとの関係から甲子園球場で開催することはできませんでした。戦時中「野球統制令」によって中止を余儀なくされ「敵国スポーツ」として道具のグローブやボールが焼かれのにもかかわらずわずか1年で復活したのです。ベアフルースらの来日、「練習ハ不可能ヲ可能ニス」の言葉で有名な小泉信三によって開かれた「最後の早慶戦」、そして甲子園大会の再開、そうやって野球の糸は繋がれ今自分はボールを握っているのだと思いながらラストを読んでいると鳥肌が立ちました。今自分がプレーしている高校野球はやはりただの部活動ではないと思いました。どこまでノンフィクションかわかりませんが沢村栄治、須田博（スタルヒン）など自分が知っている名前も多く登場し、彼らが大変な状況下に置かれながらも野球をしていたことに感動しました。また、これほどまでに題名にパワーを感じるのは初めてでした。夏空白花。夏の青空の下、茶色の焼け野原の中に咲く球児たちの白い花という意味です。高校野球は戦争により沈んでいた人々の気持ちの中に咲く希望の花だったのでしょう。チームメイト、全高校球児に読んでほしい1冊です。

遺暦からの底力—歴史・人・旅に学ぶ生き方（講談社現代新書）

出口治明（著）※推薦文の効果で現在貸し出し中

著者の出口さんは現在立命館アジア太平洋大学の学長を務めており、遺暦を過ぎてからライフネット生命を開業した方です。題名からも分かる通りこの本では遺暦を過ぎてからでも、歳をとってからでも、人間は生涯学んで生きることが大切だと訴えています。保険のあり方についてや定年の廃止の提案など、根拠を持って説明しており、今の日本がどれだけ遅れているか考えさせられました。

サブタイトルにある「歴史・人・旅」の重要性にも納得させられました。よく学校で議論されている（というか愚痴られている）「歴史は学ぶ必要あるのか問題」ですが、この本を読んで歴史は必要だと感じました。たとえば現在日本経済は低迷しています。これを抜け出すヒントが楽市楽座などの政策で経済を見事に成長させた織田信長の行った政治にあるかもしれないのです。このように現代とリンクさせて「歴史」を見たいいくつかの本書の例からいろいろなことが見えてきました。

また、現在でも世界中の国々のシステムの中に日本でも取り入れるべきシステムも紹介されていました。世界、特にヨーロッパ諸国は福祉のシステムなども整っていることがわかりとても興味深かったです。これは実際に「旅」してみなければわからないこともあるかもしれないと思いました。

そしてこの本を読んで一番強く感じたことは読書の大切さです。歴史を伝える媒体は主に書物、世界を知るみちしるべとなるのも書物、なにより、いろいろな「人」の考えを知ることができるのが本です。出口さんがこれまでに読んだ本は1万冊を超えるそうで本書で紹介されている本だけでも30冊は超えていそうです。本を読んでいる人は「賢い」と思いました。この「賢さ」は「頭のよさ」とはまったく別のもの、しかし「頭のよさ」よりも大事なものだと感じました。本をたくさん読んで自分の世界を広げていきたいです。